



「朝鮮史譚」(講談社学術文庫)は、李氏朝鮮時代の歴史書で、戦前の在日朝鮮人の詩人の金素雲が、昭和18年に書いた本です。歴史書とはいいながら、逸話、説話、伝説が主で、それだけに、面白い。

最近の韓流歴史ドラマのおかげで、閉塞した官僚社会と貧しい民衆のイメージしかなかった李氏朝鮮が身近になりましたが、この本に書かれた話を一つ紹介しましょう。時代は1600年ごろ、関が原の頃です。

鄭孝俊(ていこうしゅん)の四代の祖の鄭綜は、李朝第5代玄宗王の娘の敬恵公主の婿である。だから孝俊は富貴栄耀を約束された尊貴な血筋を引いているはずだったが、彼の生まれた家は貧乏なただの下級官吏にすぎなかった。

なぜなら、玄宗王は在位わずか2年で亡くなってしまい、幼い世継ぎの端宗が後を継いだが、3年たらずで王権は叔父の首陽大君に篡奪されるという悲劇が襲ったからである。幼君の端宗は毒殺され、兄弟たちは粛清され、災禍は敬恵公主と鄭綜にも及んだ。まもなく鄭綜は死刑に処され、敬恵公主は一人の男子とともに庶民に落とされ、官碑にされるという不幸に見舞われたのである。

その不幸な二人に救いの手を差し伸べたのは、ほかでもない首陽大君の妃の貞熹王后であった。彼女は夫の残忍な仕打ちに心を痛め、従姉妹の敬恵公主とその子の男子に救いの手を差し伸べて、二人を宮中へ引き取ったのである。

七年の歳月が流れた。

首陽大君はある日、一人の小童が池のほとりで遊んでいるのを見て、幼いながら眉目秀麗で気品ある姿に引かれ、傍近くに呼んで「名は何という?」と尋ねた。

すると小童は「父の名は鄭綜と申します」と、正直に答えた。

首陽大君は驚いた。そして貞熹王后から事の次第を聞かされると、「これが、ただ一人の玄宗王の血筋か、もそっと近う寄り」

と、たった一人残った自分の甥の手をとって引き寄せた。歳月は残忍な彼の心にも慈しみの心を育て、その小童に「眉寿」という名まで与えたのである。

こうして数奇の運命の中から成人した鄭眉寿は、王室に仕え官吏としての地位を得た。しかし王室の血を引くとはいえ、刑死人の子である。眉寿の起こした家は、次第に家勢は零泊して、鄭孝俊の代には、彼の家が王家の血をひく家柄だとは、想像すら出来なかった。

鄭孝俊が貧窮の中で進士の試験に合格し、朝堂に仕えた時は第15代の光海君の世となっていた。光海君は暗愚の王であった。朝堂は、その暗君に取り入れた奸臣たちが思いのままにしていた。鄭孝俊はそんな朝堂の有様を見て義憤を抱き、激越な上訴で奸臣たちの駆逐を進言したことから憎しみを買って、辺境に追いやられ、彼はそこで長い年月を重ねてしまったのである。

再び時が過ぎて、都では政変が起きていた。亡国の奸臣たちが失脚し、光海君が追われて、第16代の仁祖王の世に変わっていた。

鄭孝俊に都への復帰の知らせが来たのは、彼が50歳になった時である。しかし数十年ぶりに復帰した朝堂は、彼には心地よい場所ではなかった。かつての同僚たちは、妻も子も持たない落剥の老書生を冷たい目で見て通りすぎた。

そんな孝俊に声をかけたのは近所に住む李真慶である。彼は富裕な上に、朝堂での孝俊の上司でもあった。孝俊は為す事もないままに、よくこの人を訪ねた。李真慶はこの老書生の孤独な境涯に同情して、公務の暇には碁の相手をしたり、時には酒色を振舞ったりした。

そんなおり、鄭孝俊は不思議な夢を見た。彼が公務を終え、自分の家に帰り着いた時、一人のうら若い娘が彼の帰りを待っていたのである。娘は紫の衣を着ていた。そして娘は孝俊にこう言った。

「私は、昔、敬恵公主様の恩を受けたものでございます。公主様は私にあなたのお傍にあってお世話するように言われました。ですから私を妻にして下さいませ」

孝俊は目覚めてから、敬恵公主という名前が彼の祖先の中にあることを思い出した。しかし、それはもう遠い過去のことである。

鄭孝俊は、次の日李真慶に招かれていた。彼は味気ない朝餉をすますと、平常よりも早々と家を出た。李真慶の家の門口まで行って李孝俊は驚いた。そこには見かけない娘が佇んでいたのである。娘はあわてて奥へ姿を隠したが、ちらと見たその面差しは正しく夢に現れた娘である。その上、着ている衣まで夢で見た同じ紫ではないか。

鄭孝俊は暫く呆然として佇んでいたが、ちょうどそこへ顔見知りの下婢が出てきたので、「今、奥へ入った娘はこちらのご親戚かね」と尋ねてみた。

「いいえ、一番末のお嬢さまです」

「さようか、してお幾つになられる？」

「今年、18におなりです」

18と聞いて、孝俊はがっかりした。そして長い間忘れていた気持ちを、苦笑をしながら打ち消した。

その日暮を打った後、世間話の中で孝俊の縁談のことが話題になった。

「今のまま、後嗣を設けずにおけば、鄭氏の祭壇の香火が絶えてしまうことになりましょう」と、李真慶が言った。

それは孝俊も考えていた。何より彼は敬恵公主という王家の血筋を受けつぐ、たった一人の生き残りなのだ。

「家廟を絶やすの男子として最も恥ずべきことです。私が誰か適当なお相手を捜しましょう」と、李真慶は持ち前の世話好きな気性を現して孝俊に言った。

しかし彼は孝俊が手放して喜ぶと思っていたが、孝俊が返事もせず庭の一角を見つめているのを意外に思い

「それとも、貴殿にはどなたか意中のお女中でもおありかな」と、半ばからかい気味に尋ねた。すると、孝俊はまっすぐに李真慶を見て言った。

「妻ならもう決めております」

「……と、言われると」

「この家の末のお嬢様をいただきたい」

それを聞いて李真慶は驚いた。それから呆れて

「正気で言って居られるのか」と、孝俊に聞いた。

「もとより、正気ですとも、家勢赤貧、先々に望みのない五十男が、お嬢さんのような若い娘子を妻に娶りたいといったら世間が嗤いましょう。しかし、あなたも言われたように私は先祖の家廟を護らねばなりません。このままでは私の代で家廟の祀が耐えるのです。それを思うと死んでも死にきれません。まげてお嬢さんを私にいただきたい」

李真慶はせっかく親切心で声をかけたものの、図に乗って、人の娘を戴きたいなどと思うと、呆れから怒りがこみ上げてきた。

「そういうことをおっしゃるなら、以後二度と我が家への出入りはお断りいたす」と、手痛い一言を残して、そのまま奥へ入ってしまった。

ところが、このことが李真慶から妻へ、妻から娘へ伝わって、ここに思いがけないことが起こった。それというのは当の娘が自分から孝俊に嫁ぎたいと言い出したのである。

「私は、あの方が我が家に入出入りされるようになってから、いつかきっと私を欲しいと言って下さると信じていました」

それを聞いて、李真慶夫妻は必死になって諫めたが、いくらなだめすかしても聞かない。なるほど鄭孝俊には零落はしていても何となく不思議な気品があるし、彼が若い頃、僻地に追いやられたことには同情すべきことは多いが、それにしても年が違いすぎる。だが娘は譲らなかった。最後には親が折れて、とうとう、この奇妙な縁談が成立した。

一説には李真慶の夢枕に、毒殺された幼王端宗が姿を現して、鄭孝俊こそは我が廟堂の灯を護るものであると告げたという。

鄭孝俊の人生は、この婚姻を契機にして再転した。彼は妻との間に五人の子を設けたが、この五人が揃いも揃って俊才揃いで、台閣に列して名を残した。鄭植、鄭えき、鄭哲、鄭樸、鄭積の五人が、それである。

鄭孝俊は89歳の長寿を保ち、朝廷では彼が端宗王の血筋を受けつぐものとして、諸侯の末席に待遇した。18で嫁いだ妻は、大勢の妻や子に看取られながら、孝俊に先立つこと3年にして世を終えた。

(終り)

### 3月11日 春の坂道 円成寺から柳生の里へ

今月の冊子の「例会一覧」を見ていて思ったんですが、「晴れ」の日が多いですね。60回のうち、「晴れ」以外は4回だけ。まあ、こんなもんですか、温暖湿润帯の日本の気候としては。ですが、「46回、阿騎野散策」なんかは、午後からは雨だったような気もするけど、でも僕は傘をささなかった。そういうことですか。小島さんの判断は、傘をささずに歩いたら「晴れ」いいですね。



体調が悪からうが、悩み事があるうが、歩いたら「晴れ」。そういうことです。

ところで今日の柳生街道は、午後は概ね曇りで、柳生の里では多少雨に降られたりしたけど、もちろん「晴れ」ですよ、ポコア事務局の公式判断は。それにしても今年は春の来るのが遅く、柳生街道はまだ冬木立が目立ちました。

**日がかければ 何も無い庭はさびしい**

**日さえ照っていれば 万葉(ばんだ)の花の咲きにほふ心地がする**

明治の詩人で百田宗治さんという人の詩です。大阪の人です。何もなくても空さえ晴れていけば、明るい気分で生きていけるという意味でしょうか。

ところで、60回の例会を府県別に見ると、奈良20回、大阪17回、京都7回、兵庫7回、和歌山と滋賀が3回、福井、岐阜、岡山がそれぞれ1回ずつです。予想通り、奈良がトップというのは、やっぱり卑弥呼のお蔭でしょう。

朝の円成寺門前の交通事故には驚きました。ちょうど池永さんの説明で「この円成寺のある忍辱山は、平安時代に僧たちが都の喧騒を避けて、修行の地とした所」と聞いたばかりでした。修行中のお坊さんも驚かれたんじゃないでしょうか。

柳生街道は誰もが何回かは歩いている道です。僕も最初に歩いたのは40年ほど前。それから何回も歩いたけど、当時見た風景は朧げながら覚えている。そしてそれは驚くほど変わらない。奈良の高畑から柳生の里へ。あと何回歩くか分からないけど、柳生街道の道標に人生の道標を重ねてみる人もいるでしょう。

朝の朝礼で申し合わせていた「午後2時46分」の黙祷は、ちょうど柳生陣屋跡での麻殖生さんの説明の時でした。東日本大震災から一年目、死者15,854人、3155人は未だに行方が分からない。岩手県大槌町吉里吉里のお寺に、大勢の身元不明の遺骨の中に一体の子供の遺体が残されているそうです。おそらく両親も親戚も亡くなって、彼が何歳なのか、何処で生まれて何処で育ったのか、それを知っているものがもういないのでしょうか。

僕は阪神大震災の時に、ある新聞の記事に、「犠牲者を統計上の数字だけに終らせたくない。全ての犠牲者の墓名碑を立てること、それが、残されたものの使命だ、と書かれていたのを覚えています。何処の誰か分からないままに死んでいくのは、これほど悲しいことはない。この小さな命の名前が刻まれた墓名碑が、北の海辺の丘の上に建つように祈って。